

グローバリズムと重商主義

— 段階論の再構築 — *

小幡 道昭[†]

2003年3月29日

1 ブラックホール、インペリアリズム

現代資本主義をどう位置づけるのか、と問うと、それは帝国主義段階の特殊なあり方である、といった答えがたいてい返ってくる。三段階論を前提にしているわけである。これを訝しみ、いや第四段階にはいったのだ(消費資本主義)とか、脱資本主義であって、資本主義の発展段階では論じられないのだ、とか、という論者もいるにはいる。しかし、第四段階説は既存の三段階はそのままにしてもう一段階を追加しただけであるし、既存の段階論的枠組みをより強固に支持するものとなっている。また現代資本主義を社会主義への過渡期とみる立場(宇野弘蔵『経済政策論』増補版の序文など)も世界史的には社会主義への過渡期だというのであり、先進資本主義は依然として帝国主義段階だが、その外部に社会主義圏が存在しているから、その意味で歴史を鳥瞰すれば、過渡期だということであり、資本主義の本体が脱資本主義化しているというのではない(脱資本主義論はどうも資本主義の中心部分が脱資本主義化しているということであるようだが)。

しかし、グローバリズムの現実には、資本主義の原理像を見なおすことを求めているが、同時に資本主義の歴史的な把握に対しても、その基本的な枠組みを再構築することを迫っている。従来の宇野発展段階論も、根本から再検討してみる必要がある。

帝国主義段階という規定は、すべての資本主義の変容を一括してのみこんできたブラックホールである。国家独占資本主義論も、福祉国家論も、現状分析面で解明される非市場的な要因の違いは、多様であっても、段階規定は、支配的資本は金融資本であるという基本原理に還元されてきた。三段階論の魅力と緊縛は強力である。

しかし、グローバリズムもやはりインペリアリズムのサブステージなのか、という問題を考えると、落とし穴の存在に気づく。なぜかという、すべてを塗りつぶしてきた不純化論が、ともかく外見上は効きにくいからである。ここから混乱がはじまる。グローバリズムの現象を真にうけると、今度は再純化論に逆転してしまう。

もっと、根本的なところから、資本主義の発展段階像を考え直さなくてはならない。資本主義の発生の捉え方に、かなり問題があったのではないか。遡ると純粹資本主義という発想の根幹にあ

*Ver. 0.1, 2004年3月29日、「マルクス経済学の現代的課題」研究会春期合宿における報告

[†]東京大学経済学部 obata@e.u-tokyo.ac.jp

る、歴史的な事象としての重商主義という規定に、実は不明な点が多く存在しているように思えてくる。

2 ワンダーランド、マーカンティリズム

2.1 重商主義は不完全な資本主義か？

宇野『経済政策論』における重商主義段階では、商人資本（問屋制家内工業）とマニファクチュアの対抗関係が重視される。マニファクチュアが、機械制大工業のように産業部門全体を支配しない点が強調されている。ここから、未熟な、不完全な資本主義という性格付けがなされる。「発生期の資本主義」という位置づけ。

原始的蓄積を労働力商品化、エンクロージャーに結びつける観点がこうした規定を強める。原始的蓄積におけるもう一方の要因、貨幣的富の蓄積、集中は影が薄い。商人資本は古くからあるが、それは労働力商品化という歴史的条件がないと、産業資本には転化できないとされる。

2.2 エンクロージャーはどこまで影響力があったのか？

かつての移行論争が興味深い論点となる。

Ellen Meikins Wood, *The Origin of Capitalism*, 1999 では、「商業化モデル」批判：これは商人資本から産業資本へという流れを否定。「農業資本主義」支持：これは労働力商品化を重視。エンクロージャー批判：これに先行してすでに賃労働者は農業において広く存在したという理解＝農業資本主義：土地所有者＋借地農（資本家）＋賃金労働者、このもとで農業における生産力の上昇が、都市化＝工業生産を可能にするという。

農業は資本主義にとって重荷、工業から資本主義は始まったという立場を批判。既存のマルクス主義の場合、マニファクチュアか、機械制大工業か、という枠組みをでていない。

表 1: 「農業資本主義」論のインパクト

「農業資本主義」		
工業化＝資本主義化	問屋制家内工業	マニファクチュア

資本主義的生産様式＝マニファクチュアと「機械制大工業」（後の用語は典拠不明、おそらく Engels）。問屋制家内工業は、資本主義的生産様式には含まれないのだろう。独立小生産者の市場経済は、存立不可能（後述）。

2.3 資本主義は 15,16 世紀における世界市場の拡大に起源をもつのではないのか？

スウィージーたちの観点。もともと、『資本論』にある規定。

資本主義的生産の発端は、すでに 14 世紀および 15 世紀に地中海沿岸のいくつかの都市で散在的にみられるとはいえ、資本主義時代がはじまるのは、ようやく 16 世紀からである。資本主義時代が現れるところでは、農奴制の廃止はとっくに実現されており、中世の頂点をなす自治都市の存在もずっと以前から色あせてきている。(K.I., S.744)

資本主義的生産がもっとも早くから発達していたイタリアでは、農奴制諸関係の解体ももっとも早くから起こっている。(中略)彼の解放はたちどころに彼を鳥のように自由なプロレタリアに転化させ、15世紀以来の世界市場の革命が北イタリアの商業覇権をくつがえしたときに、反対方向の運動が起こった。都市労働者は群れをなして農村に追い込まれ、そこで園芸方式で経営される小規模耕作に未曾有の隆盛をもたらした。(K.I., S.744)

重商主義をマニファクチュアの時代、原始的蓄積の時代とするのに対して、もっと前に遡る立場。商業主義。ステュアートの譲渡利潤。

都市国家と国際商業。このなかで、金融機構はかなり成熟。為替取引。決済機構。

原始的蓄積の二重の意味：富の蓄積と労働力の商品化。このうち富の蓄積に資本結合論を取りこむこと。

2.4 封建制の解体は資本主義に直結するか？

資本主義社会の経済構造は、封建社会の経済構造から生まれてきた。後者の解体が前者の諸要素を遊離させたのである。(K.I., S.743)

旧体制が崩壊すれば、新体制が発生するという、歴史的漸進主義。しかし、逆行ということもある。「スウィージーよりもドップのほうが、封建制度の解体を資本主義の勃興と本質的に同一の過程ととらえる傾向が強い。」(Wood 50 頁)

2.5 自由主義段階の資本主義をどう相対化するか？

重商主義段階を明確に一つの資本主義のあり方、つまり19世紀イギリス資本主義に対する対等な発展の段階として位置づける。それは、イギリス自由主義段階の「資本主義の発生期」でない。独自に、発生・確立・没落(イギリス自由主義段階と交替)を経由したもう一つの資本主義の埋没地形である、と見なす。重商主義の没落期が、イギリス資本主義の発生期であるという重複性仮説。

たとえば「いわゆる重商主義段階は、資本主義の形成を準備し促進したという意味で、資本主義の初期の段階ということが出来るとしても」(櫻井毅『経済学を歩く』135頁)というが、ほんとうにこの意味で重商主義段階は固有の意味の資本主義の発展段階なのか、プレ資本主義なのか、はっきりしない。

2.6 重商主義段階の支配的資本は、商人資本であったか？

櫻井毅『経済学を歩く』136-7頁で述べられている疑問は、もっともだと思う。

しかし、重商主義段階に対して、最終的につぎのようなネガティブな評価をくださざるをえないところに、宇野段階論とおなじ限界をかかえている。

重商主義段階は産業資本や金融資本の段階に対して、商人資本の段階とはいえたとしても、あくまでも産業資本の成立を準備するという意味で、ネガティブな位置づけしか与えられない。(同 161 頁)

2.7 独立小生産者の商業社会は不可能なのか？

マルクスは、第1巻第12章「分業とマニファクチュア」で資本主義的生産様式と対抗させているのは、封建制ではなくて、直接には独立小生産者、手工業者である。

現代において、この再建はあり得るのか。労働者の個別契約主体としての独立性。労働力の商品化ではなく労働の（成果の）商品化。成果主義。年俸制。企業からの労働者の「独立化」。企業従属的な労働者が、労働者階級の本体であるかのごとき誤解。日雇い労働者は、ルンペンプロレタリアートであり、階級闘争の本体を担う組織労働者は、常雇労働者、組合主義となぜか見なされてきた。

アナーキズム、ネオ・アナーキズムとどう向き合うのか。独立小生産者が対等に形成する市場経済を理念化する流れ。ノンプロフィット型のNPO市場。

3 ミステリーゾーン、グローバリズム

一つの立場は、グローバリズムを自由主義と結びつける。逆流する資本主義とか、アメリカ資本主義を純粋資本主義により近いと見なしたうえでのアメリカーナイズーション。

しかし、グローバリズムは重商主義と通じる性格をもつという立場もある。商業的・金融的な性格。世界的な商業網。ところが、発展段階論としても重商主義の把握には不明確な点が多い。それは、資本主義像自体の曖昧さにもつながっている。

資本主義の発展段階論を、重商主義 自由主義 帝国主義というかたちで整理することでよいのか、とくにグローバリズムを独立の段階規定として位置づける立場に立った場合、帝国主義段階のあとに第4段階があるという整理でよいのか。三段階であれば、純化不純化という枠組みが妥当する。つまり、不純なものから純化過程として、重商主義 自由主義を、また不純化過程として自由主義 帝国主義を割り振るということも考えられる。この場合、固有の意味での重商主義段階とか、帝国主義段階とかいう発想は後退する。いずれも、過渡期であるという位置づけとなる。これに対して、逆に重商主義段階、自由主義段階、帝国主義段階という三つの発展過程があるというようにとらえる立場もある。

グローバリズムの現実、固有の意味での重商主義の形成期：第一資本主義の勃興期に射程を伸ばして、再考する必要がある。長期の歴史的視野で見れば、このレベルに匹敵する変容。

かつて（2003年春）は、それでよいかと考えた＜資本主義の二つの顔＞説、という考え方もある（竹本洋・大森、郁夫編著『重商主義再考』日本経済評論社、2002年）。いま（2004年春）は、今一度、固有の段階としての重商主義段階の存在を明確にし、いわば拡張重商主義段階的な把握の必要性を感じている。私自身は徹底的な原論研究者だが、世界資本主義論者であり、脱純粋資本主義論者であり、自由主義段階のイギリス資本主義の相対化論者である。